

仏教の女性観——SGIの視点から

栗原 淑江

はじめに

池田大作SGI（創価学会インタナショナル）会長は、『新・女性抄』において、次のように述べている。「今、女性の輝きが、世界を照らしている。新しい幸福への回転、新しい希望への回転が、女性の社会参加によって広がっている。世界のいずこにあっても、『変革』の先頭に立つのは女性である。……未来の世代と一緒に、地域へ、社会へ、勇気ある歩みを運びゆく一歩また一

歩から、不滅の歴史が生まれる。女性の正義のネットワークを、どこまで強く、押し広げていくことができるか。二十一世紀の希望の光は、ここに⁽¹⁾ある」。

SGI会長は、その思想と活動において、一貫して女性の尊厳性を強調し、女性が果たす役割に期待を寄せてきた。そうしたSGI会長の人間観、女性観の基盤は、ブッダ、『法華経』、日蓮をはじめとする仏教思想にある。会長は、仏教が本来、男女平等思想に立っているのとらえ、それらから洞察と指針を汲み出し、

現代的に再解釈、あるいは展開し、社会に発信しているのである。

本日は、主に大乘經典にみられる女性観を検討し、SGI会長によるその受容と解釈、現代的展開について一瞥したい。

1 大乘仏教における女性観

—— 女人五障説をめぐって

初期仏教においては、ブッダ自身の思想には宗教的に女性を二次的なもの、劣ったものにとらえる要素はなく、出家して教え通りに悟りに達した女性も存在していたことが知られている。一方、教団運営においては、八敬法や戒律の数など性差別的な面があったことも否めないが、それらは当時の社会通念を反映した、教団の秩序維持のための便法であったと考えられる。いわば、初期の教団においては、「女性は宗教的に差別されていたのではなく、ただ区別されていただけ」なのである。⁽²⁾

しかし、ブッダ滅後、教団が制度化されるなかで、

次第に女性の立場はおとしめられていく。それには、教団運営の中心的担い手が男僧であり、ブッダ滅後の經典の整備や加筆もかれらによって行われたことが大きく影響している。時代を経るにしたがって、ブッダの精神は薄れ、男僧たちの思いがブッダの言葉として經典に記されるようになったと考えられるのである。そうしたなかで、女性差別的、女性蔑視的な意味合いをもつ思想が形成、展開されていく。女人五障説や変成男子説である。これらは、初期經典にもみられたが、大乘仏典においてさらに展開されていく。

大乘仏教は、社会生活を営む在家者を担い手とするために、当時の社会の思想から直接的な影響を受けた。女性観についても、当時のヒンドゥー社会の女性観を色濃く反映し、それとせめぎあうものとなったのも当然のことといえよう。古来からインドにあった根強い女性差別を宗教的にどのように取扱うかが問題になったのである。

当時の女性観を代表するものに、「三従説」がある。紀元前二世紀から紀元後二世紀にかけて完成されたと

される、カーストの宗教的義務や生活規範を規定した『マヌ法典』に明確に記されている。女性には三従の掟があつて、結婚前は（父）親に従い、結婚したら夫に従い、年をとつたら子に従うというもので、全生涯を男性に服従すべきものとする考えである。『マヌ法典』には、「女性は幼い時は父の意志に、若い時には結婚した夫の意志に、夫が死んだ時には息子の意志に従うべきである。女性は自己の意志を享受してはならない」と⁽³⁾とされたり、夫は男性であるというだけで尊敬されるべきであり、神として礼拝されるべきであるとされたりしている。

仏教においては阿含や律蔵の原型部分ではみられず、クシャーナ王朝以降の諸経論にみられ、たとえば『大智度論』には「女人の礼は、幼にしては則ち父母に従い、少にしては則ち夫に従い、老いては則ち子に従う」と⁽⁴⁾とある。

こうしたインド古来の女性観とならんで、「女人五障説」が登場する。これは、女性がなることのできない五種の身分を定めたもので、紀元前三世紀後半から一

世紀にかけて出現したと考えられている。

内容は經典によつて若干の違いはあるが、たとえば鳩摩羅什訳の『法華經』では、「梵天王・帝釈・魔王・転輪聖王・仏身」の五者をあげている。⁽⁵⁾このうち、梵天王とは大梵天王のことで仏法守護の神で娑婆世界の主とされ、バラモン教では万物の根源法である梵が神格化された宇宙の造物主として崇拜されたものである。帝釈とは帝釈天のことで、これも仏法を守護する諸天善神の一人である。インド神話上の最高神で雷神であった。魔王とは他化自在天といわれる第六天の魔王のことで、仏道を成ずるのを妨げ、精気を奪うことを樂しみとするので奪命ともいわれる。また、転輪聖王とは、輪王ともいい、武力を用いず正法をもつて全世界を統治するとされる理想の王のことである。最後の仏身を除く四つは、ヒンドゥー文化の所産である。⁽⁶⁾

では、こうした思想は、なぜ生じたのであろうか。背景はいろいろ考えられるが、田上太秀は、五点にわたつて説明している。すなわち、一つには、古来インドの男性の間に女性に対する偏見と性差別の観念があ

ったこと、二つには、尼僧と男僧との間の勢力争いが生じ、男性側からの嫌がらせ、批判、差別を生み出したこと、三つには、上層階級出身者が多い尼僧に対し、低い身分の出の僧たちからのやつかみもあったこと、四つには、女性⁽⁷⁾は釈尊によってブツダと呼ばれたことがなかったとし、三十二相八十種好相の瑞相觀念を採用したこと、五つには、入滅の後、釈尊が神格化していく過程のなかで男性としての特徴を持つものとして考えられたことである。

さらに田上は、次のように指摘する。「女人五障説は原始經典のなかにあったとしても、これが釈尊の説法をそのまま伝えたものかどうかは疑問である。周知のように經典は弟子たちによって口伝され、それが二百年数十年後に文字に著されたが、その作業はすべて男性の僧侶によって行われたのである。この事実をふまえて考えると、釈尊の説法にはなかった内容を付加して伝えることもできる。おそらく女人五障説は口伝されているうちに弟子たちによって付加されたものと推測される。

……女人五障説は釈尊の人生觀、世界觀のなかにはなかったが、比丘たちが教えを口伝する過程で差別や蔑視の用語を付加して、ついには女人五障説を立てたのではないかと考えられる。女人五障説は仏説ではなかったと言いたい⁽⁸⁾。

このように女人五障説は、ブツダ自身の説ではなく、後世の男僧たちが經典に付加した思想であつたと考えられる。しかしこの思想は大乘仏教に継承され、展開していく。大乘仏教にとっては、このような、ヒンドゥー社会のなかで胚胎し発展した女性差別思想である女人五障説をどのようにに取り扱い、女性觀に組み込んでいくかが課題となってくる。

そして、女性蔑視・排除を乗り越えようとする經典が出現する。たとえば、『維摩經』では、「空」の法理により、男女の区別にとらわれること自体が迷いであると説かれ、『勝鬘經』では、在家信者の勝鬘夫人が堂々と説教をし、仏の記別を受けている。また、『法華經』等で「竜女の成仏」が説かれ、多くの女性たちに成仏への記別が与えられているのである。

2 天女が示す「空」の思想——『維摩経』

『維摩経』のなかに、シャーリプトラ（舍利弗）と天女の問答が書かれている。この天女は、ブツダの在家の弟子であるヴィマラキールティ（維摩詰）の部屋に住んでいたといわれる。維摩の見舞いに訪れたマンジュシュリー（文殊）菩薩とヴィマラキールティの議論を聞いていた天女が、感激のあまり、天から花を降り注ぐ。花を体から取ろうとするシャーリプトラと天女の間議論が始まる。⁽⁹⁾

——（シャーリプトラが）言う。「天女よ、あなたは女性としてのあり方をかえて（男性になって）はいけないのですか」

答えて言う。「私は十二年間、女性であることを探し求めてきましたがいまもってそれが得られません。大徳よ、魔術師が女の姿を変現したとして、これに對して女性としてのあり方をかえてはなぜいけないか、などと質問したら、これはどういうことになりましょうか」

「それ（魔術）には実在として完成は何もない（から、それは意味を成しません）」

「大徳よ、それと同じく、あらゆる存在は完成体ではなく、本質は幻の変現にすぎません。それなのにあなたは、女性としてのあり方をかえてはいけないのか、などとお考えになる……」

そのとき、天女は神通を行なったので、長老シャーリプトラはこの天女とまったく同じ姿になり、天女はまた長老シャーリプトラと同じ姿になった。そこで、シャーリプトラの姿になった天女が、天女の姿になっているシャーリプトラに向かつて尋ねる。「大徳よ、女性であることをおかえになつては、なぜいけないのですか」

天女の姿となったシャーリプトラが言う。『男の形が消えて、女の姿になったのですが、どうしてそうなたのかわかりません』

（天女が）言う。「もし大徳が、女の姿から再転ができるなら、あらゆる女も女であることをかえうるでしょう。大徳が女としてあらわれているように、あらゆる

女も女の姿であらわれているのであって、本来女でない者が、女の姿であらわれているのです。その意味で世尊は、あらゆる存在は女でもなく男でもない、とお説きになりました」

そのとき、天女が、神通をやめると、長老シャーリプトラは再びもとの姿にかえった。そこで、天女が言う。「大徳よ、あなたがなっていた女の姿は、どこへいったのですか」

（シャーリプトラが）答える。「私は（女にも）ならず、またかわったわけでもありません」

（天女が）云う。「それと同じく、あらゆる存在もつくられることもなく、かえられることもありません。つくられることもなく、かわることもないというのが仏陀のおことばです」……

そのとき、ヴィマラキールティがシャーリプトラに言った。「大徳よ、この天女は九十二コティ・ニユタの（多くの）仏たちにお仕えし、神通の知をもつて遊び、願いより生まれ出で、（無生法）忍を得ており、不退転の位にはいつています。人々を成熟させるために、願

力からして自らの欲するままに（天女の姿に）なっているのです」と。

ここでは、天女は、「あらゆる存在は女でもなく男でもない」として、男女の区別を認めない空の思想を示している。軽妙な対話のなかで、「空」の思想の立場から性差別を超克する方向性・可能性が語られていることが注目される。

3 勝鬘夫人の誓い——『勝鬘經』

次に、如来藏思想を通して成仏に関して男女の差がないことを説いたものに、『勝鬘經』（勝鬘師子吼一乘大方便方広經）がある。そのなかで、在家信者である勝鬘夫人は、ブッダたちを前に堂々と説法をし、成仏の記別を与えられている⁽¹⁰⁾。その次第をみてみよう。

コーサラ国王プラセーナジツト（波斯匿）王の娘であるシュリーマラーは、隣国のアヨーディヤー国のヤショーミトラ王（友称王）の妻であった。両親から仏教への帰依を勧められたシュリーマラーのもとに、ある日、ブッダが現れ、会衆の居並ぶなかで、この上な

く完全な正しいきとりを得るといふ予言を受けた。

すなわち、「夫人よ、そなたが真実の徳性によつて如来を讃嘆するという善行を積み重ねた結果、この善根によつて、夫人よ、そなたは無量・無数の劫にわたつて、神々や人間の世界の王者たる地位の成就を享受するであらう。そして、いつの世にも、私に会わないときとでもなく、私に直面すれば、いまと同様の讃嘆のことばで、私を讃嘆するであらう。（そのうえ）无量・無数の仏・世尊たちをも供養するであらう。いまよりのち、二万無数劫ののち、そなたは普賢という名の、正しく完全なきとりをひらいた世の尊敬をうけるに値する如来・世尊となるであらう」と。

それを受けたシュリーマラーは、以下にあげる十箇条の誓いを立てる。抜粋して示す（各条で、その誓いを「菩提の座に到達するまで厳守します」としているが、省略する）。

（1）世尊よ、今後、私は戒め（すなわち、道德的きまり）を逸脱するような心をけつして起こしません。

（2）世尊よ、今後、私は師長たちに対し、不敬の心を

けつして起こしません。

（3）世尊よ、今後、私はどんなばあいにも、衆生に対し怒ったり害したりする心をけつして起こしません。

（4）世尊よ、今後、私は他人の幸福や他人の成功などに対し、羨望の念をけつして起こしません。

（5）世尊よ、今後、私はほんの少しでも吝嗇の心を起こしません。

（6）世尊よ、今後、私は自分自身の享樂のために財産を蓄えることはいたしません。ただ、世尊よ、貧乏で苦しんだり、身寄りのない衆生を成熟させるためには、大いに蓄えたいと思います。

（7）世尊よ、今後、私は（布施と愛語と利行と同事という）四つの人をひきつけること（四摂事）によつて、衆生たちのために役立ちたいとのぞみます。……無雑念、無倦怠、不退転の心をもつて、衆生たちを暖かく包容しようとのぞみます。

（8）世尊よ、今後、私は身寄りのないもの、牢につながれたもの、捕縛されたもの、病気で苦しむもの、

思い悩むもの、貧しきもの、困窮者、大厄にあった衆生たちを見たならば、彼らを助けずには、一歩たりとも見捨てて行ってしまうけません。……私がそのような苦しみに悩む衆生たちを見たならば、それらの苦しみから逃れさせるために、財産の蓄えをもって（彼らの救助を）成就してのちはじめて、私は身を引くでしょう。

(9) 世尊よ、今後、私は……だれかれを問わず、私の生命の及ぶかぎり、こらしめるべきたぐいのものたちはこれを折伏し、救いとるべきたぐいのものたちに対しては、これを摂受します。

(10) 世尊よ、今後、私は真実の教えを身につけること（摂受正法）を忘れるような心はけっして起こしません。……世尊よ、誠実の教えを身に保つことによって、私も、また未来の菩薩たちも、量り知れない福德をもたらすという目的を成就するものと考えます。

次いで、シュリーマラーは、世尊の面前で、次の三つの大願をたてる。

(1) 世尊よ、私は、この真理にかけた誓いをもって、無量の衆生たちに利益をもたらす福德を積み重ね、その（積み重ねた）善根によって、世尊よ、私はいつの世にも、真実の教えを理解することができますように。世尊よ、これが私の第一の大願です。

(2) 世尊よ、私はその真実の教えを理解しえたのちに、怠けたり、おじけたりすることなく、衆生たちに教えを説く（ことができます）ように。世尊よ、これが私の第二の大願です。

(3) 世尊よ、私はその真実の教えを説くにあたっては、生命を顧みず、（財産をなげうってでも）真実の教えを護持し、真実の教えを身につけることを望みます。世尊よ、これが私の第三の大願です。

世尊よ、私は以上三つの大願を起しました。そこで、世尊はこの三つの広大な大願を説明して、「夫人よ、たとえばすべて形あるものは、空間という要素（空界）のなかにまとめられ、含められ、いれられる。それと同様に、夫人よ、菩薩のガンガー河の砂の数ほどもある（無数の）願もみな、この（そなたの起こした）

三大願のなかにまとめられ、含められ、いれられる。それほどに、この三大願は広大である」（と仰せられた）。次いで、シュリーマラーの大説法が始まる。ブツダに代わって、一乗思想 如来藏思想等を説くのである。そして偉大な説法を行う勝鬘夫人の知恵が賛嘆される。ここには三従や女人五障説への言及がないことが注目される。

「やがて、世尊の御姿が視界から遠ざかると、シュリーマラー夫人はおつきの人たちとともに、この上ない満足と喜びの表情で、互いに如来のあまたの御徳を讃え、ほとけを念じ、思い浮かべて、忘れまいと思いつながら、アヨーディヤの城に帰った。

シュリーマラー夫人は、（城に戻ると、早速）夫君のヤショーミトラ王を大乘に勧誘し、さらに、城中の女官たちで七歳以上の女子たちを、残らずすべて大乘に入信させた。一方、ヤショーミトラ王も、城中の男性たちで七歳以上の男子を、残らずすべて大乘に入信させた。こうして、（アヨーディヤの）町中のすべての人民は、みな大乘に心を向けた」。

このように在家の女性信者であるシュリーマラーが誓いを立て、堂々と説法をし、ブツダがそれをめでて成仏の記別を与えるという、興味深い話である。また、ここでは、説法のみならず、大乘を国中の人々に広めるといふ実践が強調されている点が注目される。仏教の女性観を考察する際、必ずといってよいほど言及される経典となっている。⁽¹⁾

4 竜女の成仏と女性たちへの授記

——『法華経』

『法華経』には、注目すべきいくつかの女性観が示されている。代表的なものは、「提婆達多品第十二」に見られる竜女の成仏であり、『法華経』の各所にみられる女性への成仏の記別である。⁽¹²⁾ 竜女の物語は次のようなものである。

海の真中にあるサーガラ龍王の宮殿から帰ってきたマンジュシリー（文殊師利）が、王の宮殿で『法華経』を説いたという、智積菩薩が、「その経典は非常に深遠にして玄妙な、見きわめがたいもので、他の経典で

この經典と對等のものは何一つありません。（それゆえ）この經典の宝玉を會得しこの上ない正しい菩提をさることのできる衆生がだれかいるのですか」とたずねる。

すると、マンジュシリーは、「いるのです。サーガラ龍王の娘で当年とつて八歳なのですが、知恵にすぐれ、鋭敏な能力をそなえ、彼女の身体、口と心の行いは知によつて導かれ、すべての如來の説かれたことばと（その）意味を理解するためのダーラニー（陀羅尼）を得ており、あらゆるものや（あらゆる）衆生に精神を集中する幾千もの三昧を一瞬のうちに獲得し、菩提への心を（起こして）退転することなく、広大な誓願を保ち、あらゆる衆生に対して自己自身にいだくような愛情をいだき、さらに、功德を發揮することができ、しかも、それら（功德）がかけているということはありません。顔には微笑を浮かべ、（身体は）最高のすぐれた清淨な色をそなえ、慈しみの心の持ち主で、慈愛深いことばを語るのです。彼女は正しい菩提をさとることができま

それに対し、智積菩薩が疑問を投げかける。「世尊のシャーキヤムニ如來は、（まだ）菩薩として菩提を求めて努め励んでおられたとき、多くの福德を積まれ、幾千もの多くの劫のあいだ、一度たりとも精進努力をなおざりにされたことはありませんでした。この（如來）が衆生の幸福のために身を投じなかつた地面は、三千大千世界のなかにほんの芥子粒ほどもないのです。そのあとで菩提をさとられたのです。（ですから）この（娘）が一瞬のうちにこの上ない正しい菩提をさとることができるというようなことを、（いったい）だれが信じるでしょうか」。

すると、そのとき、龍王の娘が世尊の前に立ち、仏を讃え、しかも「如來こそが、私が欲するがままに菩提を得ることについて、私の証人なのです。私は（人々を）苦しみから解き放してくれる広大な教えを説きましよう」という。

それに対し、仏弟子のなかで智慧第一といわれるシャーリプトラ（舍利佛）がサーガラ龍王の娘に語る。その言葉のなかにいわゆる「女人五障」が述べられる。

すなわち、「良家の娘よ、あなたが菩提に向かつて心を起こし、退転することもなく、量知れぬ知恵をそなえていても、それだけのことで、正しい菩提を得たものの位は得がたいのです。良家の娘よ、実に、女性のばあい、精進努力をおろそかにしないで、百もの多くの劫、(いや)千もの多くの劫のあいだ、いろいろな福德を積み、六種の完成を成し遂げたとしても、いまにいたるまで仏陀の位を得た人はいないのです。どうしてかといえ、いままでに女性(は)は(次の)五つの位に(さえも)到達したことはないからです。五つとは何かといえ、まず第一はブラフマー神(梵天王)の位、第二はシヤクラ(帝釈)の位、第三は大王の位、第四は転輪(王)の位、第五は不退転の菩薩の位です」。

そのとき、龍王の娘は三千大千世界の価値に相当する宝珠を一つ持っていたが、それを世尊に献上した。そして、世尊がそれを嘉納したことを確認すると、彼女は智積菩薩とシャーリプトラに向かつて、「私が世尊にささげたこの宝珠を、世尊は速やかにお納めくださいましたでしょうか、くださらなかったでしょうか」。

シャーリプトラが「あなたも速やかにさしあげたし、世尊も速やかにおうけとりになりました」と答えると、龍王の娘は、「その速やかさよりも」大徳シャーリプトラよ、私が正しい菩提をさとするのは、もっと速やかなのです。もし私が大神通の持ち主となつたならば、この宝珠をうけとられたかたよりも(もっと速やかなのです)」と。

すると、そのとき、サーガラ龍王の娘は、世の人々の見ているところで、また長老シャーリプトラの眼前で、彼女の女性の器官は消えて男性の器官が出現して、自分が菩薩であることをあらわして見せ、南方に赴いた。それから、塵がない(無垢)という世界において仏となり、光明で十方を照らして教えを説いている姿が見られた。そのとき、智積菩薩とシャーリプトラは沈黙した。

以上が竜女成仏の次第である。ここでは、男尊女卑の主張を舍利弗に語らせ、男女平等の主張を文殊師利に語らせている。竜女は、女性の体をひとたび男性に転じて、その後に成仏することを身をもって示してい

る。ここでは、変成男子説が女人五障説と関係づけて述べられている点と、「変成男子」が文字通り女性から男性へのいわば性転換のように表されている点が注目される。変成男子説は、転女成男説ともいわれ、女性には男性に変わったのちに成仏することができるとする思想である。この原型はすでに部派仏教のなかにもあったことが指摘されている⁽¹³⁾。

変成男子を説く大乘経典は多い。その理由としては、すでに述べたように、大乘仏教の在家信徒に女性が多かったことや、大乘仏教が一切衆生の救済という思想をもつことがあるが、さらに、女性を取り巻く社会状況の変化も影響したと考えられる。

平川彰は、「変成男子説に社会の要請があつたのか」という問いに対して、次のように答えている。「やはり、女性の力が強くなってきたのです。大乘の初期時代といえますと、インドが政治的にも経済的にも豊かな時代で、国王の後宮、お妃なんかには仏教を信じていた人が多かったのです。教団の経済は女性の信者で保っていた面もあるのです。ですから、女性でも智慧の優れ

た人がいて、鋭い質問を浴びせたりしたのでしょう。そのため、女性でも成仏できるということになったのだと思います⁽¹⁴⁾」。

ともあれ、諸経典において成仏を拒否されていた女性が、『法華経』において成仏の道を開かれたのは、画期的なことである。さらに『法華経』では、竜女の成仏以外に、女性たちへの記別が多くみられる。荊谷定彦は、ガウタミー比丘尼、ヤシヨーダラー比丘尼に対する記別などを紹介し、『法華経』の女性観は、竜女の成仏よりむしろそちらに中心があると指摘している⁽¹⁵⁾。

5 日蓮による受容と解釈

以上あげてきたような大乘仏教の女性観を、当時の人々はどう捉え、理解したのであろうか。変成男子説は、大乘経典のいたるところに説かれ、広く仏教徒の間に浸透したことが知られている。それは、竜樹をはじめとする多くの人々がそれに言及していることでもわかる。この説が、女人五障説ともあいまって代表的な仏教の女性観として定着したのはたしかである。

そして、中国、韓半島、日本へと仏教が伝播するなかで、性差別的な面がますます強調されたこれらの思想は、『血盆経』をはじめとする性差別的な偽経を生み出したたり、「女人禁制」思想を生み出したたりし、女性に劣性を刻印するようになるのである。とくに日本では、変成男子説こそ女人成仏の正統な思想として伝承された。この思想は仏教からの女性排除を決定づけると共に、女性に女性であることを厭わせたといえよう。それは、さらに女性の不浄観、罪惡観へ連結していくものとなったのである。

しかし、この思想は、日本の鎌倉時代において、仏教本来の平等思想とふたたび融合する。日蓮をはじめとする祖師たちが、差別感にあえぐ女性たちに手をさしのべたのである。

中世日本では、仏教界に新たな動きが起こり、いわゆる鎌倉新仏教が展開する。鎌倉仏教の祖師たちの女性観はさまざまであるが、従来の思想を継承するものが多いなかで、特筆にあたいするのが日蓮である。日蓮は、諸経典に見られる女人不成仏や女性排除を明確

に否定し、『法華経』に示された女人成仏を強調した。⁽¹⁶⁾

たとえば、「法華已前の諸の小乗教には女人の成仏をゆるさず、諸の大乗教には成仏・往生をゆるすやうなれども或は改転の成仏にして一念三千の成仏にあらざれば有名無実の成仏往生なり、挙一例諸と申して竜女が成仏は末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし」⁽¹⁷⁾、また、「法華已前の諸経の如きは縦い人中・天上の女人なりといふとも成仏の思絶たるべし、然るに竜女・畜生道の衆生として戒緩の姿を改めずして即身成仏せし言は不思議なり、是を始として釈尊の姨母・摩訶波闍波提比丘尼等・勸持品にして一切衆生喜見如来と授記を被り・羅睺羅の母・耶輸陀羅女も眷属の比丘尼と共に具足千万光相如来と成り、鬼道の女人たる十羅刹女も成仏す、然れば尚殊に女性の御信仰あるべき御経にて候」⁽¹⁸⁾とある。

このように、日蓮は、竜女の成仏をあくまで一念三千の成仏、すなわち自身の生命に本来そなわっている仏性を開くことによる成仏にとらえ、しかも九界の身を改めずに仏界を開く即身成仏にとらえている。した

がつて、「變成男子」説はとらない。そして、この竜女の成仏がすべての女性の成仏の先駆けであるとし、この例によってすべての女性の成仏が保証されたとしていのである。その立場から、日蓮は、数多い女性信徒のうちの何人かに、成仏を示す「日号」を与えている。

したがって日蓮は、「女人五障説」も「三従説」も明確に否定している。たとえば、「三つのつな（綱）は今生に切れぬ五つのさわり（障）はすで（既）にはれぬらむ、心の月くもりなく身のあか（垢）きへはてぬ、即身の仏なり・たうとし・たうとし⁽¹⁹⁾」と。また「女人は五障三従と申して世間出世に嫌われ一代の聖教に捨てられ畢んぬ、唯法華経計りにこそ竜女が仏に成り諸の尼の記筋は・さづけられて候ぬれば一切の女人は此の経を捨てさせ給いては何の経をか持たせ給うべき⁽²⁰⁾」と。

日蓮にとって、成仏の必要条件は男性であることではなく、信仰の確かさ、深さであった。その立場から、救いにおける男女平等を宣言している。「末法にして妙法蓮華経の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり⁽²¹⁾」

また、「此の法華経計りに此の経を持つ女人は一切の女人に・すぎたるのみならず一切の男子に・こえたりとみえて候⁽²²⁾」にそうした見解が見られる。

そうした女性観に立つ日蓮は、数多くの女性信徒たちにも、信仰者として毅然と生きるように説いている。たとえば、信仰心の揺れる夫に対して毅然といさめていきなさいとの激励の手紙が残っている。「此の法門のゆへには設ひ夫に害せらるることも悔ゆる事なかれ、一同して夫の心をいさ（諫）めば竜女が跡をつぎ末代悪世の女人の成仏の手本と成り給うべし⁽²³⁾」と。

ともあれ、法華経を信仰の核心に置く日蓮は、竜女の成仏を根拠に、宗教的資格や救いにおいて性別は無関係であると宣言した。それがブッダ以来の仏教の本来的考え方であると理解し、解釈しているのである。これは、女人成仏を否定したり、女人禁制を行ったりする当時の仏教界にあつては、画期的なことである。日蓮が「女性と仏教に関する姿勢は、鎌倉仏教の開祖のなかでもっとも進歩的⁽²⁴⁾」といわれるのも当然のことといえよう。

6 池田SGI会長における現代的展開

以上みてきたように、ブツダ、『勝鬘經』、『法華經』、日蓮等に、仏教思想における女性解放思想の系譜をたどることができるが、現代日本に誕生した創価学会はこの系譜に連なるものである。ここでは、大乘仏教の女性観に関する池田SGI会長の見解を紹介したい。その際、SGI会長は、教義解釈だけではなく、実際の運動においても女性たちへの呼びかけを行っていることが注目される。

まず勝鬘夫人については次のように語っている。

「舍衛においても、偉大なる女性の活躍の歴史があった。……勝鬘夫人は、喜んで釈尊の弟子となった。『勝鬘』の名は、サンスクリット語で『すぐれた花飾り』との意味である。まさに、その名の通り、人々に歓喜と幸福の花をもたらす美德を備えていた。

勝鬘夫人は、釈尊の前で、あらゆる苦悩の人を救済し尽くします！との気高い誓願を立てた。そして、その決定した一念のままに、人々を正法に導いていっ

たというのである。釈尊も心から讃え、『普賢如来』との成仏の記別を与えた⁽²⁵⁾」。

また、「釈尊の時代にも、現代の学会の前進と同じく、女性の活躍が光っていた。有名な『勝鬘夫人』と呼ばれる王妃も、師匠である釈尊への誓願のままに、苦悩や災害の渦巻く社会へ飛び込んで、行動していった。

この勝鬘夫人は、『師子吼者』——師子吼の人と呼ばれた。声の力で人々を励まし、声の力で悪を責めていったことを賞讃されたからである。婦人部、女子部の皆さんの姿をほうふつさせる。『師子吼』には、『師子を装うニセ者を打ち破る力』『墮落を戒める力』『恐れを取り除く力』『眷属の威光を増す力』などが備わると、經典には説かれている。勇気ある「師子吼」が、悪を打ち破る。善の勢力を広げていく⁽²⁶⁾」。

また、アルゼンチンの人権活動家、アドルフ・ペレス・エスキベル博士との対談集においても、SGI会長が、「仏典や仏教史においても、多くの女性の活躍の姿が光っております。たとえば、仏典に登場する勝鬘夫人という女性は、釈尊に次のような誓願を立て、

その誓いのままに、苦悩にあえぐ人々のために行動を貫いています」として、誓願の一部を紹介すると、エスキベル博士は、「勝鬘夫人については、東京で妻ともに会長にお会いしたおりにも（一九九五年）、『人権擁護の誓願』を立てた女性として語ってくださいました。よく覚えております」と応じている。⁽²⁷⁾

さらに、インドのバラティ・ムカジー博士との対談においても、「タゴールが深く見つめた東洋思想の精髓である仏教も、女性の力や徳に光を当てています。……勝鬘夫人は、あらゆる人々の中にある尊極の『善性』を、母のごとき慈愛で、守り育んでいくのが、『菩薩』であると説きます。そして、菩薩としての生涯の使命を、十の誓いとして立てます。……ここには、女性による崇高な『エンパワーメント』の生き方が示されています⁽²⁸⁾」と指摘している。

次に、『法華経』における竜女の成仏について、SGI会長は、「〔竜女の成仏は〕女性を差別する思想に対して、実証をもって、それを打ち破った『大いなる人権宣言』なのです⁽²⁹⁾」とし、「だれもが『性得の宝珠（仏

性』をもっている。一切衆生が平等に『宝珠』をもっているのです。そう見るのが十界互具であり、一念三千であり、法華経です。十界の中には畜生界もある。竜女は畜身ですが、当然、畜生界にも仏界が具わっている。しかし、差別観にとらわれた目には、それが見えない。生きとし生けるものに仏界を觀る法華経です。女性への差別など、微塵もありようがない。女性は成仏できないなどというならば、それは一念三千ではありえない」と指摘している。⁽³⁰⁾

ここで、SGI会長は、『法華経』において女人成仏が宣言されたことの意義を強調するとともに、それを普遍化し、差別全般に対する挑戦ととらえている。ここには、性別をはじめとする「属性」による差別はいわれなきものであるという思想が示されている。

そして、変成男子説についても、「竜女の成仏は、あくまでも『即身成仏』です。女性の身のままで成仏したのです。変成男子は、舍利弗をはじめ、成仏は男性に限られると思い込んでいた人々に対して、竜女が成仏したことを、わかりやすく示すための方便にすぎな

いでしょう。男性にならなければ成仏できないという意味ではないのです」と断言し、「本来、仏教は、生きとし生けるものを、ひとつの黄金の大生命の個々の現れと観る。それが釈尊の悟りです。それを『縁起』とも言い、『空』とも言い、『妙法』とも言うのです。その悟りの眼から見れば、男女間の上下の差別など、ありえない」としている。⁽³¹⁾

このように、仏教思想のなかに男女平等思想を見出すSGI会長は、折にふれて女性たち呼びかけ、人間としての自立と自己実現とともに、地域へ、社会への貢献を促している。たとえば、「女性であり、母である以前に、人間として、苦に束縛されない、真実の幸福境涯を築くことこそ、女性解放の究極なりと叫びたい」、「女性であるまゑに人間としての勝利者になってほしい。人間としての勝利を裏づけるものは、その人のもつ思想、哲学の深さ、人生に対する誠実な姿勢であると私は考える」等である。⁽³²⁾

それに呼応して立ち上がった女性たちの連帯の輪は、世界的規模へと拡大している。そして、二十一世紀を、

人間が大切にされ、男性も女性もともに責任を分かち合い、人間として伸びやかに自己実現し、社会に貢献しつつ、幸福感を満喫できる「生命の世紀」とすべく、活発に活動を展開しているのである。

おわりに

以上、見てきたように、仏教史をひもとくと、多くの場面で仏教の思想や制度が女性を差別し、抑圧してきたのは確かであるが、その中にもブッダ自身の男女平等観、大乘仏教經典における女性観、日蓮の女人成仏論などに脈々と流れてきた、一筋の女性解放思想の系譜が存在したことがわかる。そして、その系譜は現代のSGIにまでたどることができるのである。

仏教を奉じるということは、經典の訓詁注釈にとどまらず、その思想を自らが生きる時代状況の中で解釈、あるいは再解釈し、その精神を生き生きとよみがえらせ、生かしていくことであろう。SGI会長は、現代にあつてそれを自ら実践しつつ、人々や社会に訴え続けている。ここに、「生きた仏教」の現実の例証を

見出すことができるだろう。

注

- (1) 池田大作『新・女性抄』潮出版社、二〇〇三年、五八—六〇ページ。
- (2) 佐々木現順『原始仏教から大乘仏教へ』清水弘文堂、一九七八年、一〇〇ページ。
- (3) 田辺繁子訳『マヌの法典』岩波文庫、一六三ページ。
- (4) 「女人礼、幼則従父母、少則従夫、老則従子」(『大智度論』卷九九、『大正大藏經』第二五卷、七四八ページ中)とある。
- (5) このうち、「魔王」は、竺法護訳『正法華經』では「天魔」、チベット訳では「四大天王」である。また、「仏身」は、他の訳では「不退天の菩薩」となっている。
- (6) 岩本裕は、女性がこの五つにならない理由をあげた経典、『仏説超日明三昧經』を紹介している。そこには、理由として、「①雑悪多態なるが故に、ために女人は天帝釈となるを得ず。②淫恣にして(情欲のままに浮気して)節なきが故に、ために女人は梵天となるを得ず。③軽(薄・高)慢にして(従)順ならず、正教を(破)棄し(喪)失するが故に、ために女人は魔天(欲界の最高である他化自在天)となるを得ず。④匿態(容貌態度の隠された欠点)は八十四あつて、清淨行あることなければ、ために女人は聖帝(すなわち転輪聖王)

- となるを得ず。⑤色欲に(執)着し、濃情匿態(意味不明)にして、身口意の異なる故に、ために女人は仏となるを得ず」と。岩本裕『仏教と女性』第三文明社、一九八〇年、五三—五四ページ。
- (7) 田上太秀『仏教と性差別——インド原典が語る』東京書籍、一九九二年、九〇—九二ページ。
- (8) 田上太秀『仏教の性差別』季刊『仏教』一五、一九九一年四月、一九七—八ページ。
- (9) 以下にあげる『維摩經』の訳は、長尾雅人・丹治昭義訳『大乘仏典』第七卷、中央公論社、一九七四年、一〇九—一一二ページを引用した。
- (10) 以下にあげる『勝鬘經』の訳は、高崎直道訳『大乘仏典』第十二卷、中央公論社、一九七五年、六六—一二三ページを引用した。
- (11) この点について、立花真紀は次のように指摘している。『「シュリーマラー妃の大師子吼」というのは、私はとてもすばらしい表現だと思う。百獣の王である師子の吼え声は他のすべての動物を圧倒する。そのように現代の女性もまた真実に対して躊躇することなく、力強くあるべきだと思っている。そうした法による主体的な姿勢こそ女性がかつとも女性らしい姿なのであり、また仏教の本道であると言ってもよいのではなからうか』。立花真紀『女性のための仏教入門 女は仏になれないのか』PHP研究所、一九八九年、七六ページ。

(12) 以下にあげる『法華経』の訳は、松濤誠廉・丹治昭義・桂紹隆訳『大乘仏典』第五巻、中央公論社、一九七六年、四八―五二ページを引用した。

(13) 梶山雄一によれば、現存する漢訳阿含のなかで最も後代に編纂された『増一阿含経』に、この萌芽が見出される。そこでは、ブツダがムニ―という王女に生まれ変わっていた前生物語が描かれている。王女は、宝蔵如来を供養したいが病弱のためにできない老比丘の世話をしたために、比丘は宝蔵如来を供養することができ、数百万年後に生まれ変わって灯光如来になるであろうという予言を宝蔵如来から得た。これを聞いて、王女が自らも未来の成仏の予言を頼んだが、宝蔵如来は、女性にはブツダや他の四つの身分になることはできないとされているという理由から、この願いを拒絶し、将来、灯光如来が世に出現した時に、その如来に成仏の予言を乞うようにと語った。数百万年後、前の比丘は灯光如来となり、王女はバラモン男性に生まれ変わっていた。灯光如来を訪ねたムニ―は、来世においてブツダになるという予言を受けたのである。梶山雄一『空の思想 仏教における言葉と沈黙』人文書院、一九八三年、二一〇―二一一ページ。

(14) 平川彰・望月良晃『法華経を読みとく』上、春秋社、二〇〇〇年、二五三―二五四ページ。

(15) 『法華経』は、いたるところで『比丘・比丘尼、信男・信女』あるいは『善男子・善女人』と呼びかけている

ことが端的に示すように、あくまで男女平等の立場にあるのである。これは極めて当然のことと言える。なぜならば、先にも述べたように、法華経を含め初期大乘経典は、在家者主体の信仰運動の所産であり、一般大衆への信仰表明書であることを考えるとき、その一般大衆の世界は出家教団のような人工物ではないのであって、自然に男・女ほぼ同数で構成されているからである」と。荻谷定彦『法華経における女性』、日本仏教学会編『仏教と女性』、平楽寺書店、一九九一年、一八六―七ページ。

(16) 日蓮の女人成仏観については、拙稿「仏教史における女性の問題——日蓮の女人成仏論を中心に」『大乘仏教の挑戦——人類的課題へ向けて』東洋哲学研究所、二〇〇六年で論じている。

(17) 日蓮『開目抄』、『日蓮大聖人御書全集』創価学会、一九五二年、二三三ページ。

(18) 日蓮『女人成仏抄』、同書、四七二ページ。

(19) 日蓮『光日尼御返事』、同書、九三四ページ。

(20) 日蓮『善無畏抄』、同書、一二三五ページ。

(21) 日蓮『諸法実相抄』、同書、一三六〇ページ。

(22) 日蓮『四条金吾殿御返事』、同書、一二三四ページ。

(23) 日蓮『兄弟抄』、同書、一〇八八ページ。

(24) 小栗純子『女人往生 日本史にみる女の救い』人文書院、一九八七年、一二二ページ。

(25) 『聖教新聞』二〇〇七年八月二八日付。

- (26) 『聖教新聞』二〇〇五年四月二六日付。
- (27) 池田大作／アドルフ・ペレス・エスキベル『人権の世紀へのメッセージ』第三の千年に何が必要か』東洋哲学研究所、二〇〇九年、二四四―五ページ。
- (28) バラティ・ムカジー／池田大作「新たな地球文明の詩を――タゴールと世界市民を語る」『灯台』第三文明社、二〇一二年二月号、六〇―六二ページ。
- (29) 池田大作『法華経の智慧』第三卷、一九九七年、一四―一六ページ。
- (30) 同書、一二一―一二二ページ。
- (31) 同書、一二五―一二九ページ。
- (32) 同書、一二九―一三〇ページ。

(くりはら としえ／東洋哲学研究所主任研究員)